

発車メロディーの短縮化が駆け込み乗車行動に及ぼす影響

山内香奈 藤浪浩平 鈴木浩明

駆け込み乗車行動の抑止効果を狙いとして、駅で使用する発車メロディー1曲の長さを短かくするという実験的施策を打ち、その前後で駆け込み乗車行動の発現数の変化を調べた。その結果、オフピーク時間帯では、駆け込み乗車行動が抑制される可能性が示唆された。ただし、抑制効果の程度については駅間で差がみられ、更にデータをとるなどして検証を重ねる必要がある。また、ピーク時間帯では効果が見られなかったことについては、旅客数の多さと関係していることが推察された。ピーク時間帯では、乗降客が多く、走りたくても走るスペースがない時間が多くなる。そのため、駆け込み乗車行動の誘発要因と考えられる複数の要因のうち、発車メロディーの相対的な影響度が小さくなることが考えられる。したがって、首都圏の高密度線区の駅のように旅客が極めて多い場合には、オフピーク時間帯であっても抑制効果は低くなる可能性もある。

(鉄道総研報告, 2008年7月号)

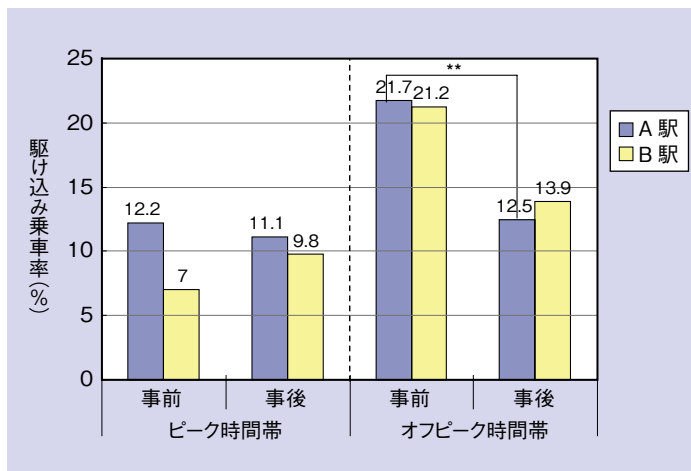


図 実験的施策を打つ前後での駆け込み乗車率の変化

鉄道人身事故に関する自殺行動モデル

赤塚肇 村越暁子 鈴木綾子 鈴木浩明 本澤卓司 楠神健

自殺のために鉄道で人の死傷が発生した事故(以下「鉄道人身事故」という)は、安定した輸送サービスを損ねる要因のひとつになっている。特に、他線区への直通運転が一般化している大都市圏の通勤線区では、その影響人数の多さのみならず、他線区への波及という点でも影響は大きいことから、鉄道人身事故に関する研究の可能性について基礎的な検討を行うことを目的として本研究を実施した。「自殺学」の知見に基づき自殺研究アプローチを整理したが、鉄道という個別具体的な手段を志向したアプローチは存在しなかった。このため、直接的な人身事故への接触頻度、間接的な人身事故への接触頻度、鉄道の身近さ、鉄道自殺の心象のあり方が、具体的な自殺手段として「鉄道を思いつく」にあたってのリスクファクターと想定する、「(鉄道)自殺行動モデル」を新たに構成した。また、このモデルについて、インターネットを用いた調査を実施し、妥当性を検証した。

(鉄道総研報告, 2008年7月号)

表 「人身事故」という言葉から思い浮かぶ事態

思い浮かぶ事態	選択率
ホームからの飛び込み	59.0%
踏切からの飛び込み	6.3%
駅間での飛び込み	4.4%
ホーム上で誤って接触	8.4%
ホームから誤って転落	12.6%
踏切に誤って立ち入り接触	5.2%
駅間で誤って立ち入り接触	0.6%
その他・答えたくない	3.4%